

# 市川のまち

地名の由来

最終回



## 古い地名を多く残す 歴史のまち市川

市川市の北部は、下総台地の西端にあたり、貝塚をはじめたくさんの縄文時代の遺跡が存在しています。また、台地の周辺には、水稲耕作を始めたころの弥生時代の遺跡もあります。

さらに、古墳も存在することから、かなりの豪族が権力をもって地域の開発にあたっていた可能性もあります。

その後、下総国を治める国府が置かれ、国分寺が建立されるなど、地方における政治・文化の中心地になりました。

このように、本市の北部は、原始・古代から多くの人々によって開発が進められてきた地域だったのです。

ちょうどそのころ、江戸川をはじめとした大小河川が上流から土砂を運んで、行徳地域がつくられていきました。今から千数百年も前のことです。そして塩焼が始められ、やがて塩浜と

して塩田が開発されていきました。

さて、このように古くから人々が生活してきた地域であったということは、各所に古い地名を残すことにもなりました。ママ(真間)、スワタ(須和田)などは古代地名の一つであり、ソヤ(曾谷)、ホツケ(キタカタ、北方)なども古代に属する

地名であると思われます。さらに、国分寺や葛飾八幡宮の建立は、その地域に「国分」、「八幡」の地名を残し、「国府台」の地名が残ったのも古代からのことだと思います。

また、本市の市名である「市川」のように、はじめは小さな地域を呼んだものが、やがて村となり町となり、そして今日の市域を代表する市名にまでなったものもあります。

このように、地名を探ることは歴史を知ることであり、当時の人々の生活に接することでもあるのです。

しかし、地名のもつ本来の意味を探ることは非常に難しいことです。本紙に地名の由来を掲載してから、既に三年が経ちました。内容は、地名の由来というよりも、地域の由来といったほうが適当だったかと思えます。それも、地名の解釈の難しさからにほかなりません。

いま振り返ってみますと、「北方」の項で「鼠」が北方の守り神だと筆を滑らせてお叱りを受けたこと、「下貝塚」の「下」は明治十二年に、現在の流山市に所在した貝塚に「上」が付けられたのに対して付けられたものであることなど、いろいろと読者の方々にご迷惑をおかけしました。それにもかかわらず、三十六回も続いたのは、読者の皆様のご支援の賜と深く感謝申し上げます。今回でこのシリーズを終わらせていただきます。

(社会教育指導員)

綿貫喜郎)

図は、弘化三年(一八四六)発行の「成田不動尊道中記并江戸近在名所川筋郡村一覽」より